

ロプシヨン・ラカニエンヌ

シン・エヴァ劇場版と「父の機能」を巡って

L'option Lacanienne

Sur le film Evangelion 3.0 + 1.0

et la fonction du père

Zoom開催

2022/6/4

15:00~18:00

下記フォームよりお申し込みください

[https://docs.google.com/forms/d/e/](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDUblrPQqj6AIA57dgb694gtkMCcR5DvpjfN8SbpV7r56gKw/viewform?usp=sf_link)

[1FAIpQLSeDUblrPQqj6AIA57dgb694gtkMCcR5DvpjfN8S](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDUblrPQqj6AIA57dgb694gtkMCcR5DvpjfN8SbpV7r56gKw/viewform?usp=sf_link)

[bpV7r56gKw/viewform?](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDUblrPQqj6AIA57dgb694gtkMCcR5DvpjfN8SbpV7r56gKw/viewform?usp=sf_link)

[usp=sf_link](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeDUblrPQqj6AIA57dgb694gtkMCcR5DvpjfN8SbpV7r56gKw/viewform?usp=sf_link)

令和4年度滋賀大学健康セミナー・一般公開

webシンポジウム

シンポジスト: 河野一紀(梅花女子大学心理こども学部)、
久保田泰考(滋賀大学保健管理センター)、西依 康(自治医科大学精神科)

今なぜ「父」について問うのか？

「父の機能」は、日本語としては聞きなれない言葉でしょう。それは個の父／パパの問題ではなく、ある社会集団の構成員に及ぶ効果・関数機能を指しており、ラカン派精神分析において重要な概念です。「父の名」、父性隠喩、そして「現実の父」とその言direといった用語を通じて、ラカンによって議論されてきたのは、「父の機能」—父は何の役立つか/父無しでは済ませられないか、という問題意識であり、それはラカン理論の変遷の諸段階を貫通する導きの糸として、私たちの精神分析に対する理解を深めてくれます。今回は特に、映画「シン・エヴァンゲリオン劇場版3.0+1.0」を取り上げて、それをラカン理論で分析するのではなく、その作品が語ることを通じて、ラカンの思索の解題を目指したいと考えます。最初のテレビ放映から実に25年を経て、2021年3月パンデミックの最中にこの作品が公開されたことは象徴的な出来事でした。その後1年以上を経て、作品が私たちの時代にもたらしたインパクトはますます高まっているように思われます。ロックダウンや自粛による社会的なリンク、集団的な結束の低下と、それを補うように回帰する蒼古的な父権的フィギュールの亡霊が、現在、私たちの現実そのものを揺るがせているのですが、現実の不安に呼応した症状(陰謀論や狂信的国家・民族主義)に対して、それらを解釈するため、再び象徴的な父を復権させることが必要なのか、という切迫した問題を、この作品は問いかけているように思われるのです。あるいは、このように問い直しても良いかもしれません—精神分析は、まだ「父」を必要としているのか？

久保田泰考